

岡山県玉野市帳場部落民における集団検血成績について

岡山大学医学部皮膚科泌尿器科教室

教授 根 岸 博
野 原 望
広 渡 隆 治
田 村 誠 一 郎

[昭和29年1月14日受稿]

1. 緒 言

昭和29年1月24日、岡山県玉野市田井帳場部落に対する総合調査の一環として、同部落民における梅毒血清反応成績について調査したのでその結果を報告する。

2. 検査対象について

同部落には34世帯、158人が居住するが、検査当日はあいにく終日の冷雨に禍いされ検血を受けるべく集つたものはその内の75人(47.5%)に止つた。そのうちわけは男37人、女38人で計らずも互に相折半する数を示し、その年齢別は次表の通りである。(第1表)

第1表 被 検 者 年 令 別

性	年	9才以下	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90才以上	計
♂		2	12	7	4	5	4	0	2	1	0	37
♀		3	13	6	6	3	4	1	2	0	0	38
計		5	25	13	10	8	8	1	4	1	0	75人

原法を併施した。

3. 検査方法について

型の如く採血し各被検者毎に村田氏及びKalmの2沈降反応を行い、さらに必要に応じて補体結合反応である Wassermann 反応

4. 検査成績

被検75例の個別血清反応成績を第2表に掲げた。

第2表 帳場部落民の集団検血成績

患者番号	性	年	血清反応			
			村 田	カーン		
1	♂	30	—	—		
2	〃	23	—	—		
3	〃	〃	—	—		
4	〃	24	—	—		
5	〃	40	—	—		
6	♀	11	—	—		
7	〃	14	—	—		
8	〃	12	—	—		
9	〃	13	—	—		
10	〃	7	—	—		
11	〃	36	—	—		
		12	〃	19	—	—
		13	♂	45	—	—
		14	♀	29	—	—
		15	♂	17	—	—
		16	〃	57	—	—
		17	♀	30	—	—
		18	♂	13	—	—
		19	♀	20	—	—
		20	♂	20	—	—
		21	〃	80	—	—
		22	〃	54	—	—
		23	♀	24	—	—
		24	〃	13	—	—
		25	♂	42	—	—
		26	♀	34	—	—

27	〃	74	—	—
28	〃	57	—	—
29	〃	29	—	—
30	♂	10	—	—
31	〃	31	—	—
32	〃	53	—	—
33	♀	14	—	—
34	♂	38	—	—
35	♀	47	—	—
36	♂	71	—	—
37	♀	30	—	—
38	♂	13	—	—
39	〃	20	—	—
40	〃	31	—	—
41	〃	26	卅	卅
42	〃	19	—	—
43	♀	73	—	—
44	♂	72	—	—
45	♀	15	—	—
46	♂	17	—	—
47	♀	36	—	—
48	♂	8	—	—
49	♀	42	—	—
50	♂	8	—	—
51	〃	18	—	—
52	♀	19	—	—
53	〃	16	—	—
54	♂	25	—	—
55	♀	35	—	—
56	〃	50	—	—
57	♂	12	—	—
58	♀	19	—	—
59	〃	〃	—	—
60	〃	8	—	—
61	♂	44	卅	卅
62	♀	10	—	—
63	♂	13	—	—
64	♀	56	—	—
65	〃	7	—	—
66	〃	54	—	—
67	〃	62	—	—
68	♂	12	—	—
69	〃	18	—	—
70	〃	12	—	—
71	〃	57	—	—
72	♀	23	—	—
73	〃	21	—	—
74	〃	45	—	—
75	♂	46	—	—

5. 考 按

前章に記載した血清反応成績によれば被検75例中陽性を示したものは2例(患者番号41, 61)であつて全体の2.6%に相当しそれぞれ26才, 44才の共に既婚の男性であつた。この両例における沈降反応の成績は第2表に示した通り村田, Kahn 共に(卅)であつたが、同時に併施した WaR. の成績もまた両例共に(卅卅)を呈した。すなわちこの2例においては3血清反応が揃つて中等度以上の陽性を示したわけであり、いずれも梅毒罹患者と見做されるものである。

同部落は玉野市に属するとは云えその市心に達するには坂一つ距て、徒歩約1時間を要し、実際には半農半漁を以て生活の資とする一寒村と云つた土地柄である。さきにわれわれが調査した県下苫田郡の山間の一僻村、大部落における検血成績(陽性率1.7%)に比較すれば今回の帳場部落における2.6%は明かに高率であつて、やはりこの場合都市に近接していると云う立地条件がその陽性率に密接な関係をもっているものと考えられる。外塚等¹⁾の北海道日高地方における農漁村大衆検血成績によればその陽性率は全体では3.22%、村落別では0~8.89%の間であつて概して交通不便な奥地において低く、さらに産業主態別にみれば半農半漁の村落に最も高く、次で純農村、純漁村の順に低率となると云う結果を挙げている事はわれわれの成績と対照して誠に興味深い。

次に第二次世界大戦以後における性病の消長に関して厚生省による届出性病患者統計に従えば、全国の梅毒罹患患者数は昭和23年(届出数216617、罹患率人口10万に対し270.0)を頂点として以後次第に減少を示している。

(中原²⁾)米国においてもこれとほぼ等しく1947年(昭和22年)を頂点としているが、梅毒(ことに早期梅毒)が1947年を中心に激増を示した事実は他の歐洲の諸国においても同様の現象であつて、その原因としては兵隊の本国帰還、社会状勢の一時的混乱等が挙げら

れ、またそれ以後の急激な減少については性病に対する予防ないし治療対策の効果、ことにPenicillin等優秀な治療薬の出現がこれに大いに貢献しているものとの見解が多い。(中原²⁾、谷村³⁾、竹内⁴⁾等)

また伝染病罹患率の順位からみても昭和24年において結核について第2位を梅毒が占めてより逐年その順位は下降線を辿っている。(小原⁵⁾)

上述の如き事情はいづれも届出性病患者数統計に基いて観察されたものであるが、この他に大学病院等の大病院の皮膚科外来を訪れた多数の一般患者における統計においても同様の現象が指摘されるのである。すなわち藤原等⁶⁾の当教室における昭和13年～同23年迄11年間の性病統計によれば、皮膚科外来患者総数に対する梅毒罹患率の比率は昭和19年において最低の4.49%を、同23年において最高の12.52%を示した。すなわちまず日華事変勃発の頃より漸次低減を示し始めた梅毒罹患率が太平洋戦争末期に至れば著明な低下を招来し、戦争終熄後には再び増加して昭和22年には最高率に達し、以後再び下降線を辿ると云う経過を示している訳である。このような動向は他のKlinik、例えば名大⁷⁾、東北大⁸⁾、九大⁹⁾、阪大⁹⁾、千大¹⁰⁾、名古屋市立城西¹¹⁾、広島日赤¹²⁾等における統計成績からも全く同様に窺われるところであつて、近年における本邦性病の消長に第2次世界大戦の影響がかなり重大な役割を果しているものであることはこれによつても容易に想像されるのである。

この間の事情に關聯してわれわれの中の1人である根岸¹³⁾は夙に次のような見解を披瀝して来た。すなわち戦争は必ずしも直ちに性病の猖獗を招来するものではないが、これに大衆生活の経済的逼迫が随伴するような事態に立至れば始めてその急激な蔓延が誘起されるものであると。その後谷村³⁾、竹内⁴⁾、黒山等¹⁴⁾の諸氏もまたこれと同様の主張を記載している。

以上戦後の梅毒の動向について諸統計を通

じて概観して来たが戦争終熄すでに10年、人心もすでに嘗ての混乱期を脱して平静を取り返し、一方大衆の経済生活もまたほゞ安定をみるに至つた今日、全国における梅毒罹患者の分布は昭和22年前後における性病猖獗期に比較すれば勿論著明な減少を来しているわけである。しかしながら上述の如き届出性病患者数或いは皮膚科外来患者数の統計等に基いて算出された梅毒罹患率の逐年の低減を以て直ちに梅毒の速かな駆梅、撲滅がわが邦において達成されつゝあるものと見做すことは云うまでもなく早計である。その理由について2、3述べてみるならば、まずPenicillin等の新駆梅剤の出現は一面においては嘗て砒素剤の発見、普及の結果がそうであつたと同様に、梅毒患者の多数を皮膚科専門医の手より広く一般医家の手に移行させると云う事態を招いているのであり、従つて上述のような皮膚科外来患者数の統計を根拠とする陽性率を以て直ちに梅毒増減の実態を明瞭に衝くものであるとは云い得ないわけである。また届出による性病者数についてはこれが実情とは更に程遠い数字を示しているものであることは周知の事実である。例えば東京都における昭和27年の調査によれば、健康保険によつて治療を受けた性病者数の内、届出られたものは10%強に過ぎなかつたと云う。比較的届出が履行され易いと思はれる健保患者においてすらこのような状態であるからその他の場合は推して知るべしであろう。そして結局種々の資料よりして東京都における性病全体の罹患率は大人の10%、梅毒だけでは5～6%、小学生だけでも1～3% (平均1.3%)と推定されているようである。(小原⁵⁾) このような事情から云つてわれわれが先年来調査して来た岡山県下各地方における集団検血成績は——今回の調査も含めて——現下一般大衆における梅毒淫浸度の実態を窺知する上に極めて有力な資料の一つを提供するものであるとわれわれは信じて疑わない。もとよりこの調査は瀬戸内海に面する一県としての岡山県の、しかも限定された範囲内における調査に過ぎ

ないものであるが、その調査対象は先ず農村に始まり更に山一、漁一、半農一半漁、島村の各部落に及ぶものであり、今回は単にその内半農一半漁村としての帳場部落についてのみ記載したのであるが、引続いて上記全部落における調査を完了しその成績を総合的に検討し得る時期に至れば——既にその大半は完了しているのであるが——互に地理的、経済的条件を異にするこれら各部落間における梅毒血清反応陽性率を比較対照することにより本邦における梅毒浸透の現下の趨勢について必ずや興味ある資料が齎らされるものとわれわれは自ら竊に期待している次第である。

6. 結 論

1) 岡山県玉野市帳場部落における集団検

血の結果2.6%の梅毒血清反応陽性率を得た。

2) 半農半漁を以て生活形態とする同部落の上記陽性率は都市におけるそれに比較すれば遙かに低率であるが、同県下の一山村におけるそれに対比すればかなり高率であり、このような差異は主として地理的条件——ことに交通の便、不便——に起因するものと見做される。

3) 第二次大戦後今日に至る迄の本邦における梅毒の消長について検討し、殊にその現今における趨勢を窺知する上にとつて有力かつ興味ある資料としての本調査成績の価値についても論じた。

参 考 文 献

- 1) 外塚, 安達, 川岸. 性病37, 157. (昭27)
- 2) 中原. 臨皮泌 6, 585 (昭27)
- 3) 谷村, 大島. 臨皮泌 3, 152. (昭24)
- 4) 竹内. 臨皮泌 6, 319. (昭27)
- 5) 小原. 臨皮泌 6, 579 (昭27)
- 6) 藤原, 前田, 古土井. 性病35, 130. (昭25)
- 7) 阪野. 性病 33, 5 (昭23)
- 8) 伊藤, 帷子. 日本臨床 8, 400. (昭23). 帷子:
性病 37, 239. (昭27)
- 9) 荒川. 性病 33, 4 (昭23)
- 10) 竹内. 臨皮泌 6, 319 (昭27)
- 11) 村山. 性病 39, 56 (昭29)
- 12) 伊藤. 第69回皮膚科岡山地方会.
- 13) 根岸. 最新医学 1, 6号 (昭21)
- 14) 黒山, 岡崎. 岡医誌 60年, 59 (昭23)